

教育学部実習地の現状について

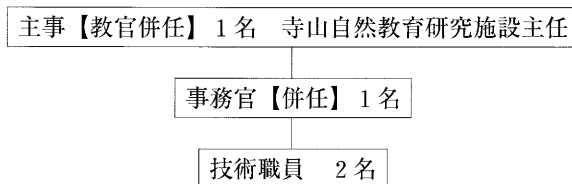
池 田 充

(教育学部実習地)

I はじめに

1998年2月戸高氏により「実習地と技術職員の役割」と題して教育学部実習地の紹介並びに現状報告がなされたが、しかしその後多面的な変化を生じて来ていることから教育学部実習地の技術職員の業務内容と現状を報告することとした。

II 管理運営



III 主な業務内容

1 栽培実習に関する内容

教育学部実習地における栽培実習は、主に教育学部技術科の学生による栽培学実験実習のため、受講する学生は限られている。また教員養成学部学生のため、ほとんどが専門的栽培に関しては白紙の状態といえることから、教官と技術職員が一体となり実習に当たらなければならない。このことは「手取足取り」ではなく、「やってみせて、やらせてみせて」から観察や体験を通して育てることの意義を考えさせることが大切と思われる、また技術職員自身をも実習内容の更なる充実を図ると共に今後、高度な技術の提供を要求される。

栽培実習では、野菜（トマト、ミニトマト、ナス、ピーマン、キュウリ、スイカ、トウモロコシ、枝豆、落花生）は肥料設計から栽培管理、収穫調査まで「播種から食」の全課程を実施し食への重要性をも理解させることが大切であると考えられる。

花壇実習では材料の（ポーチュラカ、花手毬、サルビア、マリーゴールド、ファリナセア）説明を行い、学生一人一人が設計したのち一本化に決定し、施行管理終了後の出来上りを想像し、実際の開花状況との比較をすることが可能である。また管理棟前とあって満開時は、教職員ならびに学生から高い好評を得ている。

田植えおよび稲刈りは体験することこそ意義を持つと考えられるが、なにぶん短期間の実習であるために、断片的な学習になることが受講生にとって不十分であると考えられる。

2 生産物の栽培技術向上への取り組み内容

本実習地においては、多種類多品種の作物を栽培し生産を行っている。特に野菜、花は販売用の外実習用とした自らの実験研究の材料や見本用の目的をも兼ねてやっている。

栽培技術の向上のため、より高度な技術を必要とする作物にも挑戦を図りながら、一般作物における連作障害等の回避にも努力を重ねている、このことはつまり土作りが最大の有効な方策と考え農学部の入来牧場から堆肥の提供を受け全作物に投入しているが、経費の節約はもちろんのこと、作物の出来不出来が左右され同時に土の弾力化と微生物の増殖につながることで、化学肥料に頼らない有機形の農業を最終目的として今後、更に押し進めたい。また無農薬栽培を目標に安全な農産物の生産にも取り組みつつあるが完全とはいえず、減農薬にとどまっている。現在鉢土および植物廃棄物等の最終処理を寺山研究施設に廃棄しているのが、今後はこれをも見直しリサイクル可能ないわゆる循環型に修正する必要性をも強いられている。

IV おわりに

教育学部実習地の圃場は学部校内の東側に位置するため、利便性を有効に生かし特定に偏らず、利用しやすい施設として望まれ且つ、同時に専門的活用の道を技術職員自ら模索し、理解を深めようと日々努力しているが、なにぶんにも

現状を維持することについやされることが多いため現在に至っている。

以上、述べた内容は一部にすぎないが、当実習地の将来性は不透明で方向性の示されない中ではあるものの、常に前向きな姿勢と探求心を持ち、技術職員の更なる技術の専門的修得に勤めて行きたいと考えている。

今後は農学部附属農場や関係機関のご助言とご指導を仰ぎ、今後の参考にしたい。



鍬による耕し畝たて



豆類の播種



花の配置図の作成風景



花壇に植え付け風景



田植え実習風景



稲刈り実習終了後